

第14回 今後の県立高校の在り方検討委員会 議事録

日 時 平成29年10月20日（金）

13:30～16:00

場 所 市町村振興センター大会議室（1）

1 会長あいさつ

きょうは、大きく2つの議論をさせていただきます。前半が専門高校について、後半は、これまでの議論のまとめについて議論を行う予定です。後半の資料を読みながら、いろいろな議論を重ねてきたと、少し感慨深く、2年間を振り返っているところだったのですが、ただ、これをまとめてどういうところへ持っていくのかを考えると、やはり大変な作業になるのではないかと思います。まとめていくに当たって紆余曲折もあると思いますが、あと数回、おつき合いいただきたいと思っています。

前半の専門高校についてのお話ですが、けさ、ちょうど「専門職大学」という新しいタイプの大学が平成31年度からできるという、その説明会の案内が来ておりました。現在の大学や専門学校が新たに専門的な職業人を育成することを目的とした4年制の大学、もしくは3年、2年の短期大学（この場合は「専門職短期大学」という）へ移行することが想定されるということで、産業界が求める新たな人材を育成することになります。きょう前半の話題である専門高校からの接続も十分に考えられる話題ではないかと思います。

世の中全体に、子供たちが社会人になっていくための、さまざまな選択肢が広がっていく時代になりました。そういう新しい時代の動きの10年間も見通しながら、県内の高校をどういう方向に整備していくのが良いのか、残された時間で議論をしていきたいと思っております。ご協力のほどお願い申し上げ、最初のご挨拶にさせていただきます。どうぞよろしくお願ひします。

2 議事

〔資料1を事務局より説明〕

<意見交換>

○肥後会長

6枚目の「地域ニーズにあった学科が設置できているか」のスライドに拠点校とあるが、拠点校とはどういう意味なのか説明していただきたい。

○事務局

例えば、この高校を拠点として最先端の設備を入れるなり、新しい教科等を入れるなり、それぞれの学科の拠点を中心に他の専門高校にその効果を波及していくというようなイメージである。

○肥後会長

西と東に1校ずつになったときに、こちらが拠点だと言ってしまっても良いのかという問題もあるし、全部、東に拠点が来てはいけないという問題もある。なかなか言うほどに簡単ではないかもしれない。ただ、必要性としてわかるのは、専門性の高い先生を配置するためには、専門性の高い先生を育成する必要もあるので、そういう意味で、その専門性の継続的育成を考えると、全体でできるわけではないとも感じる。その辺のイメージの持ち方が少し難しいかもしれない。

○委員

普通科高校の場合、入学時に進路が決まっていなくても、入学してから先生と相談しながら進路選択ができる。先行きが不透明な時代においては、多少、入り口と進路との間に余裕があるつくりにしたほうが良いと思っている。専門高校の今後の在り方を考えていく上で、やはり思い切った専門高校の魅力化をもっと打ち出していく必要がある。

こういう学科があったら良いのではないかという提案もあるが、もっと時代、社会、地域を踏まえて、これまでの農業、工業、水産という狭い枠で考えるのではなく、例えば、新産業創造高校、6次産業高校のような学校をつくって、そこに多様な生徒が集まって学び合える、そこで進路を選択しながら就職とか進路につなげていくという在り方を、もう少し模索しても良いのではないか。このまま農業、工業、水産、商業とあって、それぞれの中で特化して頑張っても、人口が減る時代環境の中で、正直幾らやっても限界があるのではないか。そういう現場の頑張りを押しつけるのではなく、可能性をもっと引き出せる環境を整えていくことに、もっと行政で思い切って、特に石見地域についてはもっと思い切って、踏み出しでも良いのではないかと思う。

○肥後会長

これまでのジャンルではないような学校といったときに、同じ規模の新ジャンルを考えるのではなく、例えば総合職業専門高校のようなイメージを話されたが、学校を統合して作るということか。

○委員

大きくはそのとおりである。

○肥後会長

それは可能か。結局、今の教育課程そのもの、また、さまざまな専門科目が資格取得に結びついていることもあり、なかなか専門学科の壁を越えたり、くっつけたりが難しい。中学生がこれから進路をどうしますかと聞かれても、なかなか絞り込めないことを踏まえ、もう少しものづくりならものづくりに向かって伸びていく年数を広げていく必要があるのではないかとということが言いたいことか。

○委員

そういうことである。

○肥後会長

最初に工業に入ったから、卒業まで工業ということではなく。

○委員

そう、ものづくりぐらいという感じである。

○肥後会長

教育課程から考えると、専門性を高める、高めようと思うと絞り込むことになるし、もう少し幅広く構えようと思うと、専門性が育つのはもっと後になる。その辺が社会との需要の関係でどうかという議論になるが。

○委員

そこはやはり役割分担、中学校、高校、専門学校、大学とある中で高校がどういう役割を担うかに関係していると思う。AIとか新しい技術が出てくる中で、仕事もどんどん変わっていくので、今にしか対応できないスペシャルな力をつけるよりは、そこも見通しながらではあるが、柔軟な対応力や基礎知識、コミュニケーション力も含めて育てる、そこを高校が担っていく、そのほうが良いのではないかと思う。今すぐそういう高校をつくることは難しいかもしれないが、法律や現状の枠だけで考えるのではなく、現場がこういった学校が良いと発信することによって制度や法律も変わるかもしれないので、枠の中で小さく、今こうだからこれしかできないとまとめるよりは、思い切って考えたほうが良いと思う。

○肥後会長

この辺は進路指導のイメージにもかかわってくるので、中学校の現場から見てどうかとか、さまざまな意見があると思う。現状から考えるとなかなか今の意見は難しいと思うが、逆に言うと、現状から考えずに、もう少し先を見て考えたほうが良いのではないかという意見として承る。

○委員

大きく2点。1点目は、学校と企業・地域とのコミュニケーションの重要性。2点目は、大人の役割、企業の役割・地域の役割の重要性。

1点目の中の1つは、学校と企業のコミュニケーションについてで、採用の観点。弊社でも、専門高校から新卒で何名か採用しているが、皆さんとても優秀で、大変喜んでいる。高校時に先生方が、丁寧にご指導されたのだなと感じているが、その中でもスムーズに業務に関わり、継続して勤務している方は、高校の進路指導担当の先生と、弊社の担当とのコミュニケーションが、事前にきちんととれていた場合だと実感している。今日の資料の中にも、中学校と専門高校のコミュニケーションという話があったが、この「コミュニケーション」という部分は、とても大事であると感じている。

2つ目は、お互いの窓口の明確化の必要性。商業高校で松商デパートとか出商デパートといった取り組みがあり、大変熱心で、企業とコラボして商品開発、販売をされている。一消費者としてイベントに参加したときに、「もう少しこんなマーケティングされたら良いな。」とか「こういう工夫をしたら生徒にとって生きる経験になるだろうな」と感じる場面がある。地元企業としてアドバイスしたいと感じるときがあるが、そういった際の学校側の窓口が見えないことが残念である。とても貴重な良い取組なので、企業も一緒になって応援したい。

2点目の大人の役割、企業・地域の役割の重要性について。子どもたちが中学校を卒業して、高校・専門高校に入り、卒業し、社会の場へと飛び込む場合、地元企業の一員また保護者としてその姿を見たときに、18歳で就職して、いきなり休みの少ない職場での仕事が始まった場合、毎日が仕事だけの生活になってはいないかと心配に思うことがある。休みもしっかり取って、仕事だけでなく、多くのことを経験し、自分の視野を広げてほしい、たくさんの価値観に触れてほしい。そして、自分らしさを大切にしながら、自分の可能性を広げてほしいと願っている。この点は、企業や社会側が環境を整備することが大事になってくる。個人的な見解だが、例えば副業を認めるなど、そういった働き方を社会として考えなければいけない、企業が考えなければいけない時期に来ているのだと思っている。重ねてになるが、子どもたちが狭い世界で終わるのではなく、常に視野を広げて生活できる場を整えてあげたいと、保護者、企業人の立場で思っている。

最後になるが、常に思っているのは、大人は子供たちにとって、お手本でありたいということ。島根県の高校で学ぶ生徒の周りには、高校生たちに魅力を感じてもらえる大人がいっぱいいて、「あんな大人になれるのだったらこんな学校で学ぼう」とか、「こんな社会人に

なりたい」といったことを含め、選択肢を広げ、生きる力が身につくような島根県での高校教育の在り方を、これから一緒に考えていきたい。

○肥後会長

後段の社会人になってからの話は、比較的この国では少ない社会人の学び直しという話とつながっていて、一回就職してしまったらそれで終わりではなく、そこからみずからのステップアップを図りたくなったら利用する。先ほど水産高校の話が出ていたが、新しい資格取得が必要になったときに、専門高校の先生がボランティアで資格取得をサポートしているという仕組みは非常に大事なことではないかと思った。

○委員

先ほどくくり募集の説明があったが、くくり募集ができる専門高校とできない専門高校があるのではないかと。また、拠点校の話で、特に工業系は、日々技術が進歩していて、機械にしても道具にしてもどんどん進歩している。そうしたときに、どの学校も同じように、常に新しい教材等を得て学べるのか心配である。以前、工業高校で使っている機械は、企業ではどこも使っていないという話を聞いたことがあるが、現状としてどの辺まで、機械を最新のものにする余裕があるのか。

○事務局

くくり募集は、商業系で実施しているが、教育課程上、決して簡単にできているわけではない。1年生の途中からは専門学科の科目を学習していかなければならず、苦しい状況の中での工夫である。

設備、機械については、最新のものは企業、大学などで使わせていただき、学校では教育課程上必要な設備、機械の充実、更新が大事であると考えている。

○肥後会長

先ほどの意見で総合専門科という話があったが、一番難しいのは、資格取得の関係ではないか。例えば溶接とか危険物取扱とか、そういう具体的な資格は、かなり科目が縛られているので、それをどこでどう学ぶかという話と関連しているので難しい。ただ、それ以上に、その有資格者を本当に地元がどれだけ欲しているのか、今後ともニーズがあるのか、そういうところまで追い込んで話をする必要があると思う。

○委員

ニーズに合わせて柔軟に変えていけるほうが、これからの時代大事だと思っていて、今は余りに縛られ過ぎている印象があるので、もう少し弾力的にできると良いと思っている。もう1点、離島中山間地の学校が魅力化を掲げて、地域の方が学校運営に参画したことで、も

のすごいイノベーションが起きたと思う。専門高校も、もっと社会や地域、時代のニーズに合わせて、イノベーションを起こしていくことが大切である。拠点校となる学校を一つつくって、地域や時代、社会のニーズに合った専門高校の在り方を模索していく、そういう打ち出しがあったほうが、イノベーションがより進むのではないか。

○肥後会長

その方向性は、例えば専門高校の総合専門高校化と考えるのか、それとも、普通科高校に地域課題の課題発見解決型学習的な専門性を持たせていくのか、その方向性についてはどう考えるか。今、普通科高校の特色化も少し話しているが、普通科高校を特色化することがそもそもできるのかという議論も片方にある。街場の大きな普通科高校でも、中山間地の小さな普通科高校でも、同じ科目を同じだけそろえて、それを担当する教員を必ず一定程度整備する、そういう高校を全県に配置することなのか、それともそうではないという議論にもかかわってくるが、その方向性をどう考えているか。

○委員

地域課題の解決は、ボランティア的に手伝うのではなく、自分の仕事を通じて行うものであり、専門高校のほうがよりつながりがあると思う。課題解決のためだけにあるわけではないが、もう少し意識してやっても良いのではないかと考えていて、あまり細かく工業、商業、水産と決めてやるよりは、違う可能性を探りたいと考えている。

○肥後会長

きょうの質問事項の中に入っていなかったのですが、事務局に伺うが、例えば今、農業、工業、商業という専門高校の中で、地域課題と結びついたPBL的な学習がどのぐらい展開されているか。

○事務局

専門高校、農業、商業、工業、水産とある中で、各県立高校で取り組んでいるのは、産学官が連携した形で地域課題をテーマに、どういった課題を設定して、それを解決していくかという課題解決、いわゆる課題研究に取り組んでいる。例えば工業高校では、島根県で高齢化が進む中、交通手段のないお年寄りに対して、簡単な四輪車を開発し、農業高校では、新聞でも報道されたが、出雲コーチンのような、かつて島根県で存在していたにわとりをもう一回復興して、養鶏の可能性を見出していくといった、いろいろな意味で地域貢献をキーワードに取り組んでいる。

○委員

この工業、商業、農業という大枠であれば、イメージが湧くと思うが、機械科とか電子科

とか、既存の学科名を中学生に投げかけたときに、彼らがぴんとくるかどうか。というのは、私が小学校5年生の男子に、将来何になりたいと訪ねたところ、ユーチューバーと言っていた。子供たちの考えている夢のような話かもしれないが、産業のイメージと、既存の我々世代が考えているイメージはかなり違うと思う。そういう意味で、中学生はまだ我々の世界に生きているのかなと思ったりもするが、こういった学科を選択するときの中学生の具体的なイメージがどの程度育っているのか。

○委員

工業で科名が変わる、変わるということは、そこで学ぶことが変わるということだと生徒も指導者も理解はしていて、オープンスクール、リーフレット、学校紹介あるいは直接説明を受けるとか、そういった形で、中学校の指導者も学んでいる。だから、ある意味、生徒も教員も同じものをもとに学んでいる。ただ、実際されていることと不整合がないかというところ、やはり足りない部分もあるのではないかと考えている。わからない部分については、高校に尋ねて聞く、生徒に語れるだけのものは伝えてはいるが不十分だとは思っている。先ほどの話の中にもあった、もう少し中学校の指導者もそこらあたりを学んでほしいという高校側の声があったのと一緒だとは思いますが、なかなか、リーフレットやオープンスクール、生徒の体験にもついてはいくが、そこを超えた想定は難しいところはある。

先ほど、ユーチューバーの話があったが、それは中学生もある意味同じかもしれないと思う。今、この松江、出雲、島根にある専門高校の話をしているが、生徒の農業、工業、商業というイメージが、もしかしたらもう少しダイナミックで、この島根という枠ではなく、中国地方、もしくは日本とか、あるいは地球規模とか、そういった大きなイメージの職業の捉え方のほうが実態に近いかもしれない。逆に地域の課題と言われるとわからなくなるという感じがしている。世界の自然のいろいろな環境課題とかは学んでいくが、島根とか出雲の地域課題は？と聞かれると、うん？という感じなのかなという気もしている。専門高校が地域の課題解決と言われると、すごく苦しく、難しく、見えにくいという気が逆にしている。

○肥後会長

すごくおもしろい問題設定である。今、生徒が立っている場所があって、それから、学習時期があって、その先に職業があるとするとき、その学習時期を引き延ばせという意見がある。職業というのはもっとその向こうにあるのだと。だけど、専門高校となると、その職業をぐっと引き寄せて、学習期間を詰めて、すぐ就職だぞというイメージを私たちは持ってしまうが、そういう時代だろうかという問題設定で、今の意見は、そうやるとなかなか地域との結びつきが見えにくい、遠くに置けば案外見えるかもしれないという話かもしれない。

ある種のリモートワークのようにも見えるし、すごく難しい問題だと思う。今のユーチューバーはとて素晴らしい問題設定で、ユーチューバーになるためにはどこに行ったら良いか。

機械系電子機械科か、電気系電子科か、もしくはICTなのか、商業のITなのか。でも、今のユーチューバーの人はきっとどれも出ていない。つまりその職業とその職業のためにつくられたカリキュラムが、実際に就く職業と一定のずれが生じる時代である。

○委員

専門高校が地域課題を解決すると言っているつもりではなく、働くということは誰かの課題を解決することによって稼ぐことなので、そのことを意識しながら大人になって働く、そういう意味で専門高校のほうがつながりやすいのではないかと感じている。専門高校として地域課題の解決に取り組みなさいと言っている訳ではなく、その意識が醸成されたら良いという意味合いである。

○委員

捉え方は多分同じだと思っているが、ただ、工業高校がこの地域の課題を解決するという話になると、捉え方がぎゅっと小さくなってしまふ。子供たちは課題を解決する力を幼・小・中・高と積み上げて、自分がどんな人になりたいか、どんな生き方をしたいか、結果、自分が好きなことで頑張れば一番だが、働くということはやはり誰かの役に立って、それが延いては地域貢献になるという大きな捉え方はしている。

○肥後会長

今、専門高校の魅力化という言葉が使われたから、さきほどの図式で聞くが、子供が今いる場所、学習課程、職業というように図式を書いたときに、地域の課題解決の話はどの位置にくるのか。

今、その図式の中で地域の課題解決を学習課程の真ん中に持ち込むと、イメージが凝縮してしまい、そこを子供は目指しているのではないと発言されたが。

○委員

直接、地域とつながるような地域課題研究があれば、これまでになかった、知識のみではない、学びのモチベーションを上げるという意味の課題研究もありだと思ふ。

○委員

高校はやはり教育の場なので、地域課題のための場ではないと思ふ。魅力化が良い取り組みだと思っているのは、地域の課題を解決しているから素晴らしいと言っているわけではなく、その高校がどうやったら魅力的になるかということを考えて、各高校が地域と一緒に取り組んでいることに意味があると思っている。その地域の課題を高校が解決するとい

うのは、高校の在り方として、そうだったら良いが、それはミッションではない。専門高校がどうしたらより魅力的になるのかということを経験した人ともっと考えるということがあったら良いという意味である。

○肥後会長

それが、さっき言った課題研究ではいけないのかという問いだが。

○委員

もちろん、あっても良いが、そのために県立高校があるわけではないので、それが生徒の学び、教育的に意味があるのであれば良いと思う。

○委員

最初の話で、ユーチューバーにみんながなるわけではなく、学校がまず考えるのは、どういう職業に本人が就きたくて、そのために資格、知識、技能をどうつけて出すかということであるはずである。いわゆる将来的な長いスパンでの話ではなく、今の高校の在り方の話なので、教育課程とか資格のことを専門高校が一番考えているのではないかと思う。

実際、今までだったらこういう資格が要ると思ったが、今後は変わるといった場合、いわゆる柔軟性は、当然、各専門高校の校長、進路担当、教務担当がちゃんと考えることが必要だと思う。

先ほどの中学校との関係からいうと、今、専門高校の話をしているが、理数科と普通科も一緒である。今、中学校に出かけて理数科の説明をしようと思っているが、本当に先生が理解しているかどうか。高校がいろいろ説明をして、こういうことをやっていますとか、専門高校の場合特にそうだと思うが、資格が取れるからこういうことをやっているという説明を、まず先生たちにしないとイケない。先ほどの話で、オープンキャンパスに先生が行っていろいろな情報を生徒と一緒に得るという中学校の進路指導の在り方はまずいと思う。それは高校も結局、怠っていて、こうですという説明を今までどれほどやってきたかということにもある。大社高校の体育科は、はっきりしているのであまり説明に行く必要はないと思うが、理数科の場合は、中学校の先生とある教員が話をした時に驚くような話が出てきたことを聞いたので、普通科高校でも、こういうためにこういうことをやっているという説明を今まで怠ってきたと思う。先ほどの課題研究も何のためにやっているかという説明をちゃんとしないと本当はイケないが、それで良いだろうと思っていた節が若干ある。高校全体として、そういうことがあるのではないかという気がする。

○肥後会長

教育課程上は、いわゆる専門学科の話になる。専門学科の中で、職業に関する専門学科も

あれば、それ以外の普通科系の専門学科もある。普通科系の専門学科には、理数、体育、音楽、美術などがあるが、この話は結局普通科高校の在り方に敷衍していく、特色ある学科の話につながっていくという話を総括していただいた。

<休憩>

○肥後会長

これまでの議論で私たちがどういうことを発言してきたかについて、事務局でまとめたいただいたものが資料2である。これを読んでいくと大変なことになるので、読んでこられたという前提で話をさせていただく。

今はまだ箇条書きのレベルだが、全体を文章化していくと、どこかが強調されたり、どこかは埋没したりということは当然起こるが、全体のトーンがどうなるかというところで、この問題はちゃんと取り上げるべきだということについて押さえていただくと、書いていくときの柱になる。項目立ても書いている間に恐らく変わらと思うので、暫定的にこういう形にさせていただいている。

相矛盾するテーマが入っていて、例えば普通科高校の在り方。普通科高校がどこに行っても同じような教育が受けられるということこそ普通科高校の水準として必要だという意見もあれば、どこでも一緒という在り方で良いのか、もう少し普通科高校でも教育課程の特色を出したほうが良いのではないかという意見と、両方があったと思う。両方も、どちらかのみが正しいという話ではないが、県のこれからの10年を考えたときに、どちらの方向へ向かっていくべきなのかという議論はあつてしかるべきだと思う。

○委員

島根らしさという言葉がたくさん出てきているが、島根らしさとは何か。地域性のことが言いたいのか、しまね留学や高校の魅力化のことが言いたいのか、何をもって島根らしさなのか確認したい。東部と西部では全く違うので、何をもって話をしたら良いのか、一度確認したい。

○事務局

島根らしさについてはさまざまな捉え方があり、一義的なものは恐らくないと思っている。ただ、教育魅力化の議論をする中で、島根らしさとは何かということ、各市町村それぞれの中でも話し合っしてほしいとお願いしている。県として今考えている一つの例としては、人口減少が顕著に出ている都道府県の中で、いわゆる少人数できめ細やかな教育指導がされて

いる、人口が減ったからこそ、こういう状況が起きているのかもしれないが、一つの特徴として考えている。また、いわゆるふるさと教育という形で地域と密着しながら教育活動を全国に先駆けて行ってきた、そういったことも島根の教育の特色であると思っている。そもそもふるさと教育が成り立ったのも、都会地と比較して、いわゆる地域社会が残っている、そういった中で教育活動が行われてきたからだと考えている。これは一つの例示でしかないが、例えばそういったことが島根らしさの一つと考えている。

○肥後会長

普通科高校の今後の在り方を考えたときに、どのように分類をするのが良いか。物理的、地理的に地域で分ける、東部、西部だと大きすぎるので、もう少し細かいブロックで書くことになるかもしれない。安来は安来、松江は松江、雲南は雲南で書くと、これもまた難しいので、もう少しまとまったブロックに分けて、そのブロックの普通科高校の在り方を書いた方が良いのか、それとも、そんなことはせずに、普通科高校はこうあるべきだと書くのが良いか、その辺についてはどうか。

○委員

今まで県立高校のことを地域、自治体が考える枠組みがなかったと思う。地域、自治体が主体的に県立高校の在り方を考え、県、県教育委員会も一緒に考える、そういう場づくり、枠組みが大事だと思う。松江市なり、出雲市なり、安来市なり、自分たちが育てたい子供の姿を考え、そのためには県立高校はどういう位置づけでどうあるべきかを主体的に考え、それを県、県教育委員会がサポートするという枠組みづくりができれば良いと思う。

○肥後会長

今の話は、ブロックの大きさとしてはどれくらいを考えているか。

○委員

市の場合はその市で考えてもらうのが良いと思う。町村の場合は、1つの町村だけで考えるのは大変だと思うので、少し圏域を広げて考えた方が良いと思う。

○委員

市町村が希望する高校の姿を、県、県教育委員会がサポートするというのは、主従が逆、どっちが主体でどっちがサポート、あるいはイコールなのか、疑問に思うところはあるが、かつて県立高校と地域との間はすごく離れていたが、今はすごく近い存在になってきている。もう一つ、先ほど会長からブロックをどのように捉えたら良いかという話があったが、教育長の議会答弁の中に、統廃合基準に象徴される器の在り方に力点を置くのではなく、教育の質的な向上とか転換に力点を置くのだとあるが、器のことを全く抜きにして考えて良いもの

か。器を考えたり、拠点校を考えたりする時に、島根を2つのブロックで考えるのか3つで考えるのか、それによって学校の必要感、存在意義も変わってくる。

○肥後会長

大事な論点で、両方の考え方が成り立つと思う。私が少し気になったのは、資料2の5ページにある、学校方針を誰が決めるかという問題、校長も教員も異動する中で、誰が責任を持って学校の方針を決めるのか、これは結構難しい。この話は特色化の問題を考えるときに、ある校長が打ち出した特色が、別の校長に替わったらそれはなくなってしまうという話なのか、それとも、その特色はやはりその高校の大事な特色だから維持し続けることが必要なのか、ここに関わってくるので、議論をしておきたいと思う。

○委員

地元の県立高校についても地元の自治体考える枠組みをつくって、島根県全体の子供を育てる枠組みの中に県立高校があると思うので、県、県教育委員会も一緒になって考えることが必要だと思う。地元の自治体がもう少し主体的に県立高校にかかわる枠組みがあっても良いのではないかと思う。

○肥後会長

一定程度の特色、偏りと言っても良いが、それを持たせるとすれば、それを維持し続けることが地域の力になるのではないか。たとえばの話だが、中山間地の小さな高校ではあるが、特色化とか要らないことはしなくても良いから、松江市にある高校と全く同じ教育の質が欲しい、この町や村を出ていかに松江市にある高校と同じ教育を受けたいと言われると、生徒数にかかわらず県単独で教員定数をつけ、各地域で実施しなければならなくなる。それだと特色化にならない可能性があるが、そこをどう考えるか。

○委員

そこは、県、県教育委員会と連携する必要がある。島根の教育、島根の子供を育てるといふ枠の中で役割分担と連携を県、県教育委員会と一緒に考えて、それはセットだと思う。市町村で考えろと丸投げするという意味ではなく、主体的に考えてもらいながら一緒にやるのが大切であると思う。

○肥後会長

各地域の特色や人口の違いもあるから、幾つかに分けて考えたほうが良いのではないかという意見については、どう考えるか。

○委員

今後10年、20年のスパンで考えていく中で、いろいろな教育の運営の在り方があると思う。

私は鉄道が好きだが、鉄道の世界だと上下分離という考えがあり、インフラは行政、運営は民間、地域が行うという方法がある。そういった教育とか高校の在り方も考えられるのではないかと思うし、その可能性を排除するよりは、可能性として入れたいと思っている。地域が県立高校を運営、経営する。例えば隠岐島前高校を魅力化財団が運営するといったことも、長いスパンで考えたときに、可能性としてあるのではないかと思っている。

○委員

改めて確認するが、当初、県西部の高校の再編成の議論の中で、県立高校の統廃合基準などの話があったが、そういった話はもう一切置いておくということで良いか。

○肥後会長

さきほども器の話は要らないとはいえ、本当にそれで良いのかという意見があった。この辺は皆さんの意見を伺いたい。

この委員会で統廃合基準について全く触れないと、今後はそういう話はしないとも受け取れるし、とりあえず今ある基準をどうするかについても考えなければいけないと思うが、どう考えるか。

○委員

先ほどの件でいうと、どの地域でもいわゆる教育の機会均等を保障してほしいということになるので、今までの議論の流れの中では、この町ではこうするという話には基本的にはならないと思う。かつて4クラスが望ましい規模だと言った時期があるが、4クラスを基準とすると大半の高校がなくなる。いわゆる離島中山間地の魅力化をさらに広げるという取組が進められている点からいうと、ある程度の意見反映はだんだんでき上がりつつあると思う。財政面であれ人事権であれ、制度上は恐らく当分の間は県教育委員会が持つことになるだろうが、10年後どうなっているかはよくわからない。それから考えると、可能性として書くという点はあると思う。ただ、都市部と中山間は区別して書かないと難しいと思う。例えば、西ノ島中学校は、子供が減ったためにバレーボール部も野球部もなくなり、バスケットボール部だけになった。高校以前の段階でそういう現象が起こっているが、高校を選ぶときに、ある程度部活の有無が影響することもあると思う。

今の基準を保持すると同時に、今後もこういうことは検討すべきだという形で書いておく必然性はあると思う。例えば町にある程度権限を与えとか、運営にかかわることが必要であると書いておく、コミュニティスクールのような形態の必要性を書いておくことは必要かもしれない。ただ、都市部では難しいと思うので、地理的な枠組みを考えた形で書いておくことは必要ではないかと思う。

○委員

私が言いたかったのは、県一律の基準をつくることは難しい中で、だからと言ってこの地域はこうなさいと書けるわけではない。そこは県教育委員会に任せることになるが、統一の基準ではなく、もう少し地域の実情とかを踏まえて考えた方が良い。その中で、都市部と中山間地域では実情が違うので、そこは分けて考えたほうが良いと思う。中山間地域では、もっとネットワークとか連携を考えていくことが一つの方向だと思っている。部活動では少しずつ連携し、一緒にやったりしているが、学習面でも考えていく検討の余地があるのではないかと考えている。

○肥後会長

現状、県立高等学校の再編成基本計画の中では、普通科を設置する1学年2学級の高校、専門高校もしくは総合学科を設置する高校、それから1学年1学級の高校の3つのタイプに分けて、一定の基準に達したら統廃合も検討するという書き方になっている。その目的は市町村から高校をなくしてしまうことではなく、一定の高校教育の質を確保するために、一定の規模になったら、もっと良い教育の在り方を模索しようという、そういう観点から書かれている。

一方で、いわゆるコミュニティスクールの実質化、高校におけるコミュニティスクールの実質化をやることによって、小中高と地域の中で一貫した教育体制がとれるということの一つのメリットなので、それを生かしながらやっていかなければいけない地域もあるという意味で、そのことは生かしていくという考え方で良いと思っている。市部のことについては別の検討が必要だということも考えたい。

○委員

都市部と離島・中山間で分けるのは当然良いと思うが、都市部の定義を考えたほうが良いと思う。松江や出雲、浜田、益田などが都市部なのか、江津も都市部に入っているが、同じとして考えて良いのか。

○肥後会長

中山間地と都市部とに分けるというより、例えば、松江市、安来市を1つとし、出雲市、雲南市、奥出雲町を1つの地域として考える。それから、大田市、飯南町、川本町、美郷町、邑南町あたりまでが1つの地域。そのような範囲の掴み方でいうと江津市、浜田市が1つの地域としてイメージできるかもしれない。益田市、津和野町、吉賀町が1つ、あとは島嶼部といったイメージ。いま、たとえばということで6つに分けたが、そうするという意味ではなくて、そのくらいの規模感・掴み方で見ていったら良いのではないかと考える。

それこそ都市部と離島・中山間地というところ、どこが都市部なのかという疑問が出てくるし、同じ都市部でも松江と出雲では事情が違うという話もあったので、そこは混ぜないほうが良いとも思った。それで作文してうまくいくかどうか分からないが、それぞれの地域の在り方も考えながら、どういったところがコミュニティスクール化していくべきなのか、あるいは普通科高校の間で特色を出し合ったほうが良い地域なのか、そういったことを書き分けていければ良いのではないか。

○委員

議論の中で教育の中身の話がかなり展開されたと思うが、そのあたりをどのような形で書くのか、もう一つ私には見えない。こういうことを今後検討しなければならないというような書き方で終わるのか。

○肥後会長

教育課程そのものについてこの委員会で書き込んでいくことは、なかなか難しい。例えば、普通科高校といえどもみんな同じ教育課程ではなく、違うものと言ったときに、意見が2つあって、宣伝文句としては書けても、普通科高校であれば一定の縛りがあるので、そこを逸脱することはなかなか難しいという考えもあるし、普通科といえども教育課程を偏らせることは可能ではないかという考えもある。大学入試が今後どう変わるかということにも関わってくるが、その辺をどうするか。本当の意味で個性化、特色化となると、教育課程をいじらなければいけないが、それについての書き込みができるか、この委員会単独ではなかなか難しいとは思っている。

専門高校の単位数も、例えば25単位とかの基準があって一定程度決まっているが、実際は資格取得のための科目なども詰め込んでいくと、あまり融通の効く教育課程にならない。資格を取ることがどのくらい就職に結びついているか、そういう議論とも関係してくるので、教育課程の研究を安易にやってしまうと子供に不利益を与えてしまうので、非常に難しいところはある。

○委員

前回、最後に話したが、個人調査報告書いわゆる内申書の割合を30、学力検査の割合を70にすると、傾斜配点が生きてくる。かつて松江工業だったと思うが、傾斜配点を入れようとしていた。また、長らく松江市立女子高校が英語の配点を傾斜していたと思う。だから、学校が選択する幅をこれからは広げないといけない。50：50が良いという学校もあるだろうし、専門高校のように60：40が良いという学校もある。この前も話したが、大社高校の体育科は70：30で、圧倒的にいわゆる中学校で何をやってきたかを重視している。幅を広げておけば

おくほど、学校としては、生徒や保護者に、うちはこんな学校ですよと言いやすい、示しやすいくことは確かだと思ふ。

それと、当事者なのであまり言えないが、通学区のことは触れないといけないと思ふ。松江市と出雲市とは様子が違ふので、その辺は分ける必然性がある。

部活動については、松江北高校もついに男子バレー部が単独では成立しなくなり、今度の新人戦は、出雲高校と合同チームを作つて出場する。かつては三刀屋高校と出雲高校が一緒にチームを組んだことがあるはずである。大規模校でもそういう現象が起こる。今後も少子化が進む中では、チームの学校間での合同化を進める話をどこかでしないと、生徒が一生懸命練習したのに結局出られなかったという話ではかわいそうなので、そういう部分は必要だと思ふ。

○肥後会長

部活動は生徒の学校生活を支える一つの重要な核なので、どうやってバラエティーを保障するかということも考えなければいけないと思ふ。

それから、特色化をしたときに、その教育課程に合わなくなった場合、どのくらい転校とか転学科を緩やかにするか、そういう視点もいると思ふ。特色化をすると、セーフティネットの問題も同時に考えなければいけない。地域にもよるが、等質等量にしないのであれば、逆に転校とかの垣根は低くしておく必要がある。

○委員

学校の形、器を変えるのであれば、学びの場を保障することはすごく大事な観点だと思ふ。

○委員

この委員会で議論すべきことかどうかかわからないが、教員の多忙解消と教員の確保、研修。学校の特色づくりのフレームが決まり、特色化に向かつていくとき、今の人事異動の在り方で良いのか、どの程度言及していくのか気になる。

○肥後会長

教科の下には科目があり、高校の先生は比較的その科目に対する高い専門性を持っているので、教科の中の科目まで追つて、どういう教育の質を保障するかとなつたときに、各校に全部配置するわけにはいかない。このあたりも教員のブロックの中での活用も考えざるを得ないと思ふ。

○委員

部活動を中心に学校間連携が進んでいると思ふが、教員も学習面を含めて、どう有効活用するか、ネットワーク化も含めて考えていく必要があると思ふ。

○肥後会長

いわゆるチーム学校の観点で考えたときに、コーディネーターの配置を今後どうするか、地域課題と生徒を密接に結びつけるという一定の専門性があるので、こういった人材をどう位置づけるかも考える必要がある。それこそ、島根らしい教育の在り方を考えたときに、島根らしい配置をしないとうまくいかない面があるのではないかと思う。これをどのくらい、どう書くのが良いか、コーディネーターの果たす役割が非常に大きく、特色ある教育につながっているという意見もあったので、その辺をどのくらい書けば良いか。

○委員

東京で島根県出身の大学生のセミナーにゲスト講師として招かれるが、そういう中で教育とか人づくりに興味がある学生がたくさんいる。だけど、そういう学生にとって、島根県の教員の門がすごく狭い。それでも関わりたいという学生がいっぱいいるが、そういう学生の力を島根県は生かしていないと思う。教員以外の選択肢がないか、でも、やはり関わりたい学生にとって、コーディネーターという存在があることはすごく島根県にとっても力になると思うし、コーディネーターがいるかないかで魅力化の取組に違いがあると聞いている。教員の多忙感の話が先ほどあったが、先生がやるべきこととの役割分担の中で、コーディネーターの力、外部人材の力を生かしていくというのは島根らしさの一つだと思うので、ぜひ、積極的に入れてほしいと思う。

○肥後会長

先ほど専門高校の魅力化という話が出ていたが、そういう意味では専門高校にもコーディネーターを配置することも一つ考えられるのではないか。地域産業との結びつきや、地域ではない遠いところでも、専門性を生かしてこういう進路があるのだということをコーディネートする、進路指導の担当教員がされているかもしれないが、そういうコーディネーターが1人いても良いのではないかと思う。

○委員

小・中学校のふるさと教育を中心にコーディネーターが入り、本当に動きが変わり、いろいろなものを生み出した。専門高校でも有用ではないかということだが、普通科高校でも例えばコーディネーターがいると動きが変わって、また違うことができるのではないかと思うがどうか。

○委員

魅力化の取組の中でコーディネーターが配置されているが、その人たちが外部との問題や県外募集について動いている。教員は授業をやっているので、その部分で大変助かっている

と思う。松江北高校ではどうかと聞かれると、今は教員がコーディネートしているが、コーディネーターがいると生徒にとっては有効ではないかと思う。

○肥後会長

魅力化校のコーディネーターにはモデルタイプがあるが、都市部の普通科高校は、試行錯誤の段階なので、これからどういうタイプの方が良いか、どういう活動が良いかといったことを探っている途中ではないか。いずれにしろ、そういう教員ではない、教員と地域、産業、生徒と地域、産業、そういったつなぐ役割の人を入れて、チーム学校にしていく発想は必要である。問題は人件費をどこが持って、どこに配置するかということ。今、コーディネーターは学校配置ではないが、その辺をどう考えるか。

○委員

もっと欲しいと考えている自治体もあるかもしれない。松江市も松江市立女子高校の在り方を考える上で、県立高校の在り方がどうなるかは、全く無視できないと思う。協議する場もないし、出雲市とも状況が違うので、松江市の中で高校、県立高校も含めて考え、要望し、県、県教育委員会とも一緒になって考えていく形がつけると良いと思う。

○肥後会長

松江市の問題を考えるときには、松江市立女子高校のことも、ある程度、考慮しながらの議論になるのではないか。

○委員

それが良い、あれが良いと細かく言うのではなく、地元の自治体と県、県教育委員会と一緒に考える、高校の在り方を考える場ができれば良い、その仕組みができれば良いと思っている。

○委員

学校をある程度のグループで考えることは必要だと思う。しかし、実はことし、公共交通機関を使って全ての県立学校を全部回ったが、地域といっても各学校はそれぞれ非常に離れていて、やすやすと連携をとることは難しいということを感じた。

そういう意味で、ICT化とかネットワークを構築することが外せない、お金がかかる問題ではあるが、そう感じている。

○肥後会長

県内の高校の授業を全部見たわけではないが、一定レベルのICT化は一気に行う必要がある。一定程度のインフラ整備は必要で、その後の活用の話もあるが、ぜひ頑張って予算化していただきたい。

3 閉会あいさつ（松本教育次長）

きょうは本当に、少ない人数だからこそ濃密な議論がなされたと思います。本当にありがとうございました。

この検討会に参加させていただきますと、いつもお話を聞きながら自分も一生懸命考えているのです。いろいろなことを考えておりました。その中で1つ思ったのが、専門高校の話が最初、議題として取り上げられましたが、私、長らく行政職として産業振興とか産業支援の仕事に携わっていました。いつも思っていたのは担い手の話です。戦後間もなく高度成長の中でさまざまなアントレプレナーがこの地域でも誕生して、そして中小企業の社長として創業していかれました。その人たちがもう50年、60年と経過して、社会や時代が変革してきて、事業承継も大事ですが、新たなアントレプレナーの出現を渴望しているわけです。そういった中で地域の高校、普通科高校、専門高校がどのように今後教育をしていくのか。イノベーションマインドであったり、アントレプレナーシップであったりとか、そういったところをどのように育てていくのか、そして次世代のアントレプレナーを誕生させていくのかというところが、私はまた、この議論の背景にあるのだろうなと思って聞いておりました。

あと2回、提言（案）の取りまとめ、本当に短い中で大変な作業だと思いますが、どうかよろしくお願ひしたいと思います。きょうはありがとうございました。